

# 牧草と園藝



夕長部長沼町字幌内一〇六六  
雪印種苗株式會社

中央研究農場

雪印種苗株式會社



# 五十嵐専務 草地功労者として表彰さる

● 去る八月二十九日第十六回日本草地学会の席上、日本草地学会より、長年に亘り、北海道の草地酪農の発展に功労のあつた、町村敬貴（町村牧場）町村金五（北海道知事）二瓶栄吾（酪農家）五十嵐清（雪印種苗株式会社専務取締役）の四氏が表彰を受けました。



今年に開道一〇〇年に当り、この意義深い年に草地学会秋期大会が北海道で開かれましたことは先人のつちかつた跡を回想してみると非常に感深いものがあります。北海道の今日までは開拓の歴史であり、農業においては府県農業とは異にした西洋農法、大農法が、ホーレスケブロン、クラーク、エドウィン・ダン等の指導によりとり入れられ、これに伴って、畜産、有畜農業が次第に北海道に定着し、戦前は軍馬の供給基地として北海道に草地、牧野の面積が拡大し、飼料作物の種子供給が大切な事業となり、太平洋戦争のぼつ発と前後して牧草種子も全面的に国内自給を余儀なくされ、

北海道においてもその端はずで昭和十二年に北海道畜産組合連合会が若干の採種圃を経営し、この仕事の担当者が五十嵐専務の若き日の姿でありました。

この中で五十嵐専務は戦前から今日まで三十数年間に亘り、飼料作物、牧草種子の品種改良並びに供給事業にたずさわわり酪農家の皆様方の御支援をいただきながら、今日の雪印種苗の基礎を築いたのであります。当社といたしましても益々その任が大きい事を痛感し、より一層優良種子の生産と供給に精進致す覚悟であります。

## ☒ 牧草、飼料作物種子 供給事業を回顧して

五十嵐専務は当時の北海道農業試験場長安孫子孝次さんより、これからの日本農業は北海道のみならず府県においても飼料作りは大切であり、有畜化、酪農は必ずや一大発展をとげると先見の明を持って説かれ専務はこの導きを、一生の仕事とすることに専念、誓をたてて今日に到つたわけであり

ここに到るまでの系譜を振り返つてみますと、昭和六年安孫子さんが道庁農務課兼務となつた当時の農務課には飼料作物の専門の係がなく、畜産課に飼料に関する係があつたにすぎず、飼料作物の生産奨励が北海道においては食用、特用作物と並んで重要である事を強調され、昭和十二年初めて農務課に飼料作物係が置かれ、的場寅一氏が専任の係となり、道が積極的に飼料作物の栽培奨励を推進したのであります。

昭和十五年に北海道農業戦時生産拡充期成会が中心となり、牧草飼料作物種子の道内自給を企画し、道がその採種事業に補助金を増額して、採種事業を拡大することになり、前記畜産組合連合会の採種事業が一段と拡大されました。

尚町村敬貴氏によってクローバ種子を脱粒する大きな機械、クローバハラが初めてアメリカから輸入されたのもこの頃でした。

昭和十六年戦時対応の為に北海道興農公社が設立されることになり、種苗、農機具、酸性矯正用の石灰製造や排水用土管の製造等農業生産拡充の基本になる事業を興農公社が経営することに官民の意見が一致したので昭和十六年四月公社設立と同時に畜産組合連合会経営の採種事業が移管されることになり、同時に当時畜産飼料作物主任であった五十嵐技師を迎え、チモシー、オーチャードグラス、赤クローバ、デントコーン、家畜ビート等約二、〇〇〇畝の採種圃を経営、非常な苦難を経てなんとか自給の



線までこぎつけ終戦を迎えました。

戦後の昭和二十五年十二月雪印乳業株式会社（当時は北海道酪農協同株式会社）から種苗部が独立し、雪印種苗株式会社となり、一方昭和十九年四月酪連発祥の地として名高い、酪農養塾も興農公社種苗部の原種農場となり、その後上野幌種場と名を改め今日に到つております。戦後も赤クローバの道内採種は順調に伸び年によっては道産種子が輸入種子量の三七％も占めたことがあります。その後は酪農の全国的な発展機運と共に飼料作物種子の需要は益々増大し、経済諸条件の変動、海外市場の好転等で現在は大半が輸入種子ですが、上野幌種場において優良品種の育成、改良をすすめ、今日まで多くの雪印育成品種を世に送り出し、一部は海外（アメリカ・カナダ）に委託採種し、優良種苗、品種の普及、販売に努めております。

「たね」は生きものです。また酪農の基礎であります。私共はこの使命の重要性をかみしめ、日夜努力いたしておりますので、皆様の御支援を心からお願い申し上げます。